



Title	大阪の思い出
Author(s)	前原, 喜彦
Citation	癌と人. 1998, 25, p. 41-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23846
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪の思い出

前 原 喜 彦*

思いもかけず平成8年度大阪癌研究会助成金をいただいた。はるか九州の地より応募して受賞の通知を手にした時は、受賞の喜びと同時に18年前大阪で過ごした2年間の思い出が蘇り、大阪との強い絆を感じた。

私は昭和52年に九州大学医学部を卒業し、第二外科（当時井口潔教授）に入局し、2年間の臨床研修ののち九州大学生医研生化学（当時遠藤英也教授）の大学院へ入学した。大学院4年間のうち、最初の2年間を大阪大学蛋白質研究所、（故）藤井節郎教授のもとに国内留学することとなった。藤井先生は九大を昭和24年のご卒業で、医化学教室に入局され、当時の（故）山村雄一教授のもとで助教授を務められ、山村先生が大阪大学第3内科教授として御転任ののち、藤井先生は徳島大学医学部酵素研の教授、さらには昭和51年より阪大蛋白研の教授として赴任されたところであった。

右も左もまったくわからない大阪であったが、吹田市豊津に住居を定め、北千里にある蛋白研で研究をさせていただくことになった。

当時の藤井研は総勢30名と基礎としては大所帯で、多くの魅力ある研究プロジェクトが進行していた。その後大鵬薬品工業より保険適用となり、現在わが国で最も頻用されている抗癌剤の1つであるUFTについての基礎的研究のまっただ中であった。藤井研の多くの研究者がUFTの作用メカニズムや抗腫瘍効果について精力的に実験を重ね、藤井先生も毎日のようにデータが出てくるのを今か今かと待っていた姿が今でも目に焼きついて離れない。藤井先生の

研究に対する真摯な態度や、常に臨床を視野に入れた基礎研究の進め方など、多くのことを学ばせていただいた。

UFTはUracilとFTがモル比で4：1で配合された薬剤で、近年流行りとなったBiochemical modulationの走りとも言えるべき薬品である。藤井先生の先見の明に今さらながら敬服の意を表するものである。UFTのプロジェクトに参加していた池中君（後述）に後日聞くところによると、UracilとFTという薬品名はまったく教えられず、原沫を2種類渡され、分子量のみの情報でモル比を種々変えて抗腫瘍効果について実験せよとの指示であったそうである。UFTは消化器癌の多くの患者さんにその有効性が示されており、感慨深いものがある。

私は研究テーマとして“ヒト正常および癌組織におけるピリミジンヌクレオチド合成と5-FUの代謝に関する研究”をいただいたが、私の博士号の論文となった内容である。これまでの多くの研究より、私が検討したDNAの代謝に関与した酵素であるThymidinephosphorylaseやDihydropyrimidine dehydrogenase, dTMP synthaseなどは5-FU系薬剤の感受性に重要な役割をしていることが明らかとなり、今思えばはるか15年前にこのような研究テーマをいただいたことを誇りに思うと同時に、現在の自分の研究の大きな源流の一つとなっているように思う。

当時、蛋白研で上司であった白坂哲彦先生は、現在大鵬薬品工業の応用医化学研究所長として御研究を続けられ、UFTよりさらに抗腫瘍作用の強いS-1という新規抗癌剤を開発された。

* 九州大学医学部第二外科 平成8年度研究助成金交付者

私もその臨床試験に参加させてもらったが、近い将来、必ずや臨床の場で高い有用性が示されることを期待している。白坂先生にはさらに、基礎および臨床研究について日々御指導いただいているところである。また、大学院で同じ学年であった池中一裕君は岡崎の生理研の教授となり、遺伝子治療の基礎研究の第一人者として活躍されている。藤井研で同じ外科系出身であった中根恭司先生は、関西医大第二外科助教授となられ、消化器外科領域の学会などでいつ

もお会いして親交を深めている。

18年前大阪の地でお会いして以来、(故)藤井先生をはじめ多くの先生方の知己を得たことは、私の一生の財産であり、大阪は忘れることのできない土地である。大阪癌研究会よりいただいた助成金は有意義に活用させていただいたが、今後の研究を推進する上で大きな励みとなったことを申し添えて、私の感謝の気持ちとしたい。

